熊本県ふるさと顕彰

熊本県ふるさと顕彰は、ともすれば埋れがちである郷土の伝統的な工芸又は民俗芸能の維持に努めておられる方々や団体者を顕彰し、その意欲の高揚をはかるとともに地域社会の発展に役立てようというねらいで五十年度から実施しているものです。今年の第四回熊本県ふるさと顕彰についても県下の各市町村から多くの顕彰候補者の推せんをいただいたなかから伝統工芸の部五名、民族芸能の部十団体が選ばれ、昨年十一月十五日に県庁知事応接室で顕彰式があり、知事から顕彰状が贈呈されました。

顕彰を受けられた方は、いずれもそれぞれの分野において伝統を受けつぎ今日に生かす努力をなされ、地域の方々と力を合わせてその継承・保存に努めておられます。

そこで今回、顕彰を受けられた伝統工芸五名と民俗芸能十団体についてその概要をご紹介します。

伝統工芸の部

「名称」　肥後三郎弓

「対象者名」　松永萬義（七十九歳）　芦北町

「伝統工芸概要」

松永萬義氏は大正十三年から芦北町で肥後三郎弓の製作に従事されており、この肥後三郎弓は、中心の竹を焼いて油抜きし、はぜの木をそいでにべを火で溶かして仕上げるもので、京弓の整った形と薩摩弓の力強さを組み合わせて両方の弓の長所を生かしたものであり、弓の愛好者に高く評価されている。

肥後三郎弓（松永　萬義氏）

「名称」　竹細工

「対象者名」　樽井秀雄（七十二歳）　八代市

「伝統工芸概要」

樽井秀雄氏は大正六年、日奈久尋常高等小学校六年のとき竹細工作りの手ほどきを受け、六十年間にわたり伝統を受け継ぎ竹細工の保存に努力している。竹の皮を使って作る魚籠が代表的なもので、ナタや小刀で細かく割った竹の皮を編みながら作りあげる細やかさが特色である。

竹細工（樽井　秀雄氏）

「名称」　肥後柄巻

「対象者名」　堀スミカ（六十五歳）　熊本市

「伝統工芸概要」

堀スミカ氏は四十四年間にわたって肥後柄巻きに従事されており、今日、柄巻きの第一人者として愛好者の間では有名である。肥後柄巻は肥後細川公の時代からうけ継がれた由緒あるもので鹿皮、鮫皮、絹糸、和紙を材料とし、すべて手づくりによるもので、皮のすき方に独特の技法がある。

肥後柄巻（堀　スミカ氏）

「名称」　木葉猿窯元

「対象者名」　永田礼三（四十一歳）　玉東町

「伝統工芸概要」

永田礼三氏は七代目として木葉猿の製造に従事しその保存と維持に努めている。木葉猿は大正年間に文芸倶楽部主催の土俗玩具番付で東の横綱になっており、純粋な手びねりで素焼の荒いタッチの素朴さととぼけた味が愛好家にうけており、悪病、災難よけ、子宝、安産の守神として今日まで親しまれている。

木葉猿窯元（永田　礼三氏）

「名称」　おばけの金太

「対象者名」　厚賀新八郎（三十三歳）　熊本市

「伝統工芸概要」

厚賀新八郎氏は家業であるおばけの金太の製作に従事されその伝統をうけついで民芸製作に意欲を示している。おばけの金太は紙、竹、木を主な材料としてすべて手づくりによるもので糸をひくと目をむき、舌をだすからくりをもっている所が大きな特色となっている。熊本が全国に誇るからくりじかけの人形であり熊本のすぐれた観光土産品としてその価値が高い。

おばけの金太（厚賀　新八郎氏）

民族芸能の部

「名称」　岩下神楽（菊池市）

「対象者名」　四丁分岩下神楽保存会（代表者・河上唯雄外三十五名）

「民俗芸能概要」

岩下神楽は肥後神楽の流れをくむものと思われ、今から二百三十三年前から始まったものと考えられ素朴な笛、太鼓のリズムにのって勇壮な独得の舞を展開する。演舞は八座からなっており一座の舞が二十～三十分位行われ、地区住民の手によって保存育成されている。

岩下神楽（菊池市）

「名称」　野出春日神社大神楽（河内町）

「対象者名」　野出春日神社大神楽保存会（代表者・村上清基外三十名）

「民俗芸能概要」

野出春日神社大神楽は今から四百五十四年前の大永元年に起源を発し、民俗芸能として間断なく継承され現在に至っている。演舞は十一座からなっており六時間に亘って演舞される。毎年十月十五日の大祭日に演舞され、地区住民の連帯意識の高揚に大きな役割を果たしている。

野出春日神社大神楽（河内町）